ポットポイント

落葉たい肥農業と武蔵野新田

この三月下旬と四月末と所沢およびその周辺を歩いてきた。神の山やトトロの森をはじめとする雑木林と三富新田の見学がねらいであった。別途、昨年一二月以降、二回にわたって本欄で紹介のあった原村政樹監督による映画「武蔵野」も見に出かけた。そこでの雑感二つ▼三富新田は落葉たい肥農業で日本農業遺産として認定されている。クヌギ、コナラ等の落葉広葉樹の落ち葉を発酵させ、たい肥として農地に循環させる。三富新田は七〇ｍ×七〇〇ｍの一戸当り区画が、屋敷と畑と雑木林の三点セットで構成され、畑と雑木林を一体化することによって落葉たい肥農業を可能にする。この地割は中国の宋の王安石の手法に学んだとされるが、真偽は不明だ。これは裏山の落ち葉をかき集めてたい肥にしてきた里山の伝統的な循環農法を、平地に雑木を植えることによって可能にしたものではないか▼武蔵野での新田開発は川越藩主松平信綱にはじまり、その後、やはり川越藩主の柳沢吉保が三富新田に着手。そして徳川吉宗による享保の改革のいっかんとして江戸町奉行・大岡越前の命を受けて武蔵野の新田開発をすすめたのが川崎平右衛門となる。すなわち武蔵野の新田開発は川越、所沢等の武蔵野の西部中心に開発がすすめられ、小金井等の東部は最も開拓困難として最後に残されたところだ。この新田開発を可能にしたのが玉川上水とその分水であった。落葉たい肥農業に川崎平右衛門がどう向き合い、いかにして現状に至ったのかが気にかかる。

（土着菌）